

第4回文化を培うこれからの国土交通行政を考える懇談会
(議事概要)

平成19年2月15日(木) 10:00～12:15

東海大学校友会館 「望星の間」

【講演者】今日は文化力による地域の活性化について大地の芸術祭を中心に話をします。大地の芸術祭は2000年の真夏から3年ごとに50日間づつ開かれた、越後妻有という東京23区あるいは琵琶湖より多少大きい地域で行われた広域による地域づくりのプロジェクトです。

その中で一つのよりどころになったのが、径庭（みちにわ）です。道路と家の間にきわめて花を多く植えるということです。これは自分たちが花が好きだというだけではなくて、往還する人々に対するホスピタリティーなんですね。ここに戻りさえすれば何とかやっていけるのではないかと。これが私たちの出発になったイメージです。

この大地の芸術祭について、現在までも行政に非常に文句を言われているのは「こんな広い地域で点在させるな。きわめて非効率である」と。現在の価値観は「最大の情報に最短でアクセスする」ということで行われていますが、「ここで生きてきた地域それぞれを、それぞれの人にとって最も重要なものだとして出発させよう。200の集落にこだわり続けよう」ということが、この出発です。ですから国、県の合併とはまったく正反対な方法を取り出したということです。

1回目の大地の芸術祭が終わり、去年は35万人を超す人たちがここを訪れました。

平均1泊2日ですが、東京都の現代美術館で作品を見るのではなくて作品をたどる道ということの中で、土の感触、あるいは風、草いきれを含めて五感が開かれていくプロセスを体験してもらったことが重要です。

農業を通して1500年、大地とかかわってきたその景観、あるいは生活、広い意味でこれを里山と言いますが、「里山をちゃんと見てもらうための仕掛けとして、アートをきっかけにやっつけよう」というのが、大地の芸術祭の出発です。

越後妻有は、アートを通して地域とよその人たちがいろいろかかわるということができてきましたが、半年の雪、あるいは冬をどう味方にするかということが、今後の大きな課題になっています。

結論的に言うと、主に三つのことがこの大地の芸術祭の特色だと思います。

一つは、里山ということ正面にかかげてやったということです。二つ目は、この地域の人たちの特性、地域、世代、ジャンルが180度違う人たちがかわり出したことによって何かが生まれてきた。これがかなり大きな特色です。こへび隊と言われる学生たちが中心の動きですが、この地域に入っている。ただ、地震以来、学生たちはなかなか自分の時間をうまくつくれないうわけですから、大人たちがかなり出始めました。これが二つ目です。

三つ目ですが、20 世紀は都市の時代で、アートも都市のアートです。都市が病み、痛むにつれて、アートも都市の病状を表すようになってきた。アートが本来持っていた人間との非常に近い関係、あるいは人を元気にする力、そういったものがこの時代のアートは失われてきたわけですね。

いまの結果といいますと、フランス、オランダ、オーストラリア、イギリスでは、大地の芸術祭を国がいろいろなかたちで手伝ってきています。つまり地球環境的な時代において、都市型のアートだけではないアートの可能性というものを、越後妻有の大地の芸術祭に見いだしてきた地域があるということが言えると思います。

簡単に申し上げますと、景観の焦点には住民がいる。ところが人間がぐんぐん減ってきているわけですね。その経過の中で、とにかく里山の景観だけは残っている。それをテコに、アーティストが結果的に、里山を見る仕掛けとしてのアートをつくったわけですね。そういう中で、現在いろいろ起きてきたことは、棚田のオーナー制度、あるいは産直、家の廃屋再利用、空き家プロジェクトです。去年で言うと 60 を超える空き家にかかわり、七つの廃校に手を入れました。そして、そこにオーナーがついていくということが起きてきたわけです。それでコミュニティーを元気にしていく。

これを媒介したものは、この地域の人たちだけではなくて、外部の人たちとの出会いです。もともと越後妻有には、都市の人たちのいろいろな意味での手伝いが必要だとは思っていました。それはいまでも変わりません。より重要なのは、都市の人間たちが生まれた場所ではないところにふるさとをつくり出しているということです。

私は、まちづくりの指標というのは、老人がどれだけ元気かということしかないと思っています。この地域は圧倒的なお年寄りです。十日町市街部を抜かすと、あとの 5 町村は高齢化率が 45% 近い。「お年寄りこそが、とにかく大切に力なんだ」ということをやろうとしたのが、松之山の「森の学校」です。お年寄りにできる限り GPS 内蔵のカメラを渡しています。今日マイタケが出たら、それを撮ってください。オニヤンマが孵化したら、それを撮ってください。この地域のいろいろなことを、ものすごく知っているわけですね。

そのデータが森の学校に送られてきます。ここに来た子どもたちは、今日オニヤンマを見たいというと、昨日どこで見たよ、去年のいまごろはどこで見えたというのが、ここで全部見えてくるわけですね。

最後に、今年は「植物」と「土」と「空き家」ということを、里山を見るという仕掛け以外にオプションとして力を入れました。これは板橋区に住んでいる方が、年に 1 回、法

事で帰るか帰らないかという家です。壊すのに 300 万のお金がかかる。毎年雪下ろしで非常に大変である。撤去もできない。ただ雪国の家は、柱と梁はすごくいいわけですね。

これを生かして、マリーナ・アブラモヴィッチという女性アーティストですが、四つの部屋に民宿型のベッドをつくりました。驚くことなかれ、これが黒字です。ここで見る夢をみんなが書き綴っていく。民宿をやっていますが、これは集落の人たちにとってのアルバイトにもなる。というよりは、いろいろな人たちが来てくれてうれしい。この家を残せる。マリーナ・アブラモヴィッチの作品を見られるという効果があるわけです。

アーティストがいまできることは、計量化できない「時間」を見せることではないか。越後妻有では、固有の土地に流れてきた時間をアーティストたちが形にししました。

いま冬へ向かってのいろいろな準備をしていますが、とにかくいろいろな人たちが手伝ってやって、かなり元気になってきたということです。ちょっとオーバーしましたが、終わります。

【座長】 大変独創的な芸術祭のお話をどうもありがとうございました。

【委員】 ある意味では観光になると思うんですが、こういった情報を、そこに行った人以外のうわさとか、経験とか、そういうものが後にも語られるようなことになっているのでしょうか。たとえばテレビで放映されるとか。

【講演者】 いわゆる広報費は、ほとんどここでは使われていません。20 万人以上は来ていると思いますけれども、ほとんどロコミです。

【委員】 次の地域の計画はあるのでしょうか。

【講演者】 これは 2009 年も行われますし、ここで動いたこへび隊というのは、結構いろいろ動いて、みんなでつながってやっていますね。

【座長】 2009 年とおっしゃいましたが、これは毎年じゃなくて。

【講演者】 3 年に 1 回です。もう、これもギリギリですね。3 年に 1 回の準備で。

【委員】 お聞きしたいことが 2 点ほどありまして、1 点目はここを訪れる人たちはどの地区から来る人が一番多いのかなというのと、宿泊施設はどうされているのかなという部分を教えていただきたいと思います。2 点目は住民の方々と、いまでも合意しきれない人と、やっぱり合意して良かったなという人はどんな関係性にあるのかなということを教えていただきたいと思います。

【講演者】 まず半数以上が首都圏の人間です。地元が 4 分の 1、新潟県内はまだ弱いですが、今年は県内の子どもたちに無料パスを出しました。

次に、役所あるいは地域の有力者たちは本当に頭に来ています。河川とか、道路とか、それはかなりいろいろな意味で県、あるいは国交省の人たちの協力を得てやっていますが、手間がかかって、情報は開かれていって。大地の芸術祭は、私はお金は一切要りませんでしたが、かなりのかたちで土木の中に入れさせていただいています。そういうことを大地の芸術祭として発表してしまっているわけですね。

【座長】 仕事とか利権に多少かかわる部分があるということなんですか。

【講演者】 住民の意見を入れて、楽しいようなデザインにして、遊べるようにしたいということをやり出すから、時間や、見積もりなど役所の人やゼネコンさんの手間が膨大にかかるわけですね。でも、これがやれたら日本は本当に変わりますよ。

【座長】 お待たせしました。よろしくお願いします。

【講演者】 今のお話はアートで里山を蘇生するというか、日本の原風景を蘇生するようなお話だったと思いますが、私は都市もアートでいろいろなかたちで蘇生されているという話をさせていただきたいと思っています。

いま日本の文化政策というのは、いろいろな意味で曲がり角に来ていますが、環境変化ということで考えると、大きく三つあるのではないかと思います。

芸術や文化というのは、劇場で見たり美術館で見たりするものだという認識が圧倒的に強いですが、実は教育であったり、福祉であったり、まちづくり等にも芸術や文化が非常に大きな力を発揮するというのが、最近認識されるようになってきております。

文化政策というのは、いまは文化という一つの領域の政策ではなくて、国の基幹政策として文化を位置づけていくことが重要になってきているというのが1点目の変化です。

いままでは、文化政策というのは国や地方公共団体が中心になってやっていたわけですが、アート NPO、あるいは指定管理者制度で公立文化施設の運営に参入した民間事業者、それからいま公益法人制度改革などが進んでおりますので、民間、公共、すべてが一体となって、新たな公共で文化的な都市経営を行っていく時代になってきているというのが2点目です。

それから3点目の変化は、文化政策というものが、とりわけ都市政策や産業政策と結びつけられて語られることが非常に多くなってきたということです。これは国際的なトレンドで、クリエイティブインダストリーというのはイギリス政府が提唱したのですが、クリエイティブな要素に基づいて行われる産業群、たとえば建築デザインとか、ファッションとか、広告、テレビ、そういったものに、文化、芸術も含まれています。

もう一つが、クリエイティブシティと呼ばれているものでして、とりわけEU諸国が多いんですが、脱工業化で衰退してしまった産業都市をアートで再生しているというケースが非常に多いです。

例えば、造船業の技術をアートで再生した英国のニューカッスル・ゲーツヘッド、巨大な産業遺構をアートセンター、デザインセンターに再生するドイツエッセンのツォルフェライン炭坑、スラム化した公共住宅をアートで再生するダブリンのバリマン地区、その他にもスペインのビルバオ、英国のグラスゴーなど、クリエイティブシティの成功例は各地に存在しています。

日本では、横浜や金沢がクリエイティブシティを標榜していますが、一昨年前橋で行われた全国アート NPO フォーラムでもアートによる都市再生がテーマとなりました。

前橋の中心市街地は各地で問題になっているいわゆる「シャッター通り」の状態です。

使われていなかった建物のオーナーと地元のアート NPO が交渉して、この 1 階をカフェにして、いろいろな展示をしています。中にインスタレーションがあって、ここもフォーラムの場所になるように運営されています。

「創造都市」というものは、イギリス人のチャールズ・ランドリーという方が提唱されていますが、いままでは量や規模を競い合う都市だったものが、個性や質の違いを認め合い、共存する都市になっていくということ、それから効率や経済性を優先した都市から、もっと人間性を重視した都市へ復活していくという、そういうことではないかと思います。

昨年、ニューカッスル／ゲーツヘッドで **World Summit on Arts and Culture** という大規模な国際会議が開かれましたが、そのキーワードは芸術文化によるトランスフォーメーション、あるいはリジェネレーションということでした。つまり「社会を変えていく規範となる、牽引力となるものは文化や芸術である」ということが高らかにうたわれています。

最後に、先ほどご紹介したロワイアル・ドゥ・リュクスがロンドンで行ったパフォーマンスのダイジェスト版をご紹介します。

(ビデオ上映)

【講演者】 物語は、あるとき宇宙から巨大なロケットが落ちてきて、そこに乗っていた少女が、巨大な象との 3 日間のアドベンチャーを楽しむというストーリーです。

【委員】 何か伝説があつてという。

【講演者】 そうではないです。作品として象を選んだということですね。私はこれをアミアンで見たんですけど、子どもから、大人から、当然高齢者の方も、みんなもう目を見

張って、何とも言えない圧倒的な存在感でした。

【委員】 つくるお金とか、どうしたんですかね。

【講演者】 それはナント市とアミアン市の共同制作ですので、そこがかなりお金を出していると思いますし、市の文化局長が自ら民間からファンドレイズしたそうです。

【委員】 一つの観光ストーリーをつくっているような、そういう感じに見えますね。

【座長】 もとはナントの芸術祭の一環か何かですか。それともこれは単独のプロジェクトなんですか。

【講演者】 芸術祭の一環ということではなくて、エロー市長が就任して、このカンパニーをナントに招聘したんですね。そこでこういう巨大なものをつくる場所を提供して、何年かに1回、こういう巨大なパフォーマンスの作品をつくっていると。これは入場料を取るわけではないので、市が助成したり、民間からのファンドレイズでやっているということですね。

【委員】 これは毎年こういうふうに3日間やるんですか。たとえば日本のお祭りみたいに日にちが決まっていますか。

【講演者】 毎年やっているものではなくて、これをアミアン市とナント市でやったのは2年前なんですけれども、その後その作品を世界の各都市が招聘しまして、ロンドンですとか、アントワープですとか、ついこの間のニュースでは南米のチリでもやられたようです。

【委員】 日本では、たとえば電線とかがあるから、おそらく不可能というか問題がたくさんあると思います。それこそ国土交通省のお仕事だと思いますが、巨大なものは本当に不可能で、たとえばねぶた祭りは青森はあれが売り物ですから、ちゃんとそのときは電線を取ったり、いろいろ積極的にやっていますが、ねぶたが東京の中でもできるかというところではないでしょうか。

【講演者】 そうですね、ねぶたでも、五所川原のねぶたはすごく背の高い3階建てぐらいのものらしいですね。ある情熱家の地元の方が、それを復活させるというので、電柱から何からみんな取り除くようなことをやられたという話を私も聞きました。

【座長】 これに先立つ伝統か何かあったんですか。突然こういうイベントが生まれたんですか。

【講演者】 フランスは大道芸が大変盛んでして、ヌーボーシルク、サーカス芸術とも言われているんですけれども、その伝統があって、最近フランス政府は大道芸の振興に大変

力を入れているんですね。フランス全国にいろいろな大道芸のカンパニーがあるそうなんです、ロワイアル・ドゥ・リュクスというのは特に大規模で、こういうスペクタクルな作品を行うので知られているそうです。

横浜市でもうすぐ開港 150 周年があるので、このカンパニーを呼べないかということで、いろいろやってはいるんですが、まだ実現できるかどうかわからない状態でして、ぜひ文化を培うこれからの国土交通行政のシンボリックなプロジェクトで、国交省さんにスポンサーになっていただいて、こういうことができないだろうかと個人的には密かに思っています。どうもありがとうございました。

【座長】 ありがとうございました。文化行政と都市計画、まちづくりということで、それでは最初のお話と、いまのお話を一緒にしまして、時間が来るまで自由に討論をしたいと思います。どうぞご発言をお願いします。

【委員】 都市計画ということでいろいろ携わっていらっしゃると思うんですけども、たとえば東京というよりも地方都市ですね。商店街のアーケード問題があると思うんですね。最近、郊外店が多くなって、まちの中のアーケードが本当にゴーストになっていて、人が集まる場所の流れが変わってしまっています。

それから、みんなまちまちの感性というか、考えがいろいろ違うんですけども、デザイナー中心の、一つの感性から来た都市計画がすごく大切なことだと思うんですね。日本はまとまり性というか、リーダーシップを取る人がいないのと、そういうものを認めないという風潮があって、すごくやりにくい。

じゃあ、そこの活用をできるかということ、なかなかそれも警察が許さないとか。私の例ですと、私は岸和田ですが、お祭りのときは別格でいいんですけども、ふだんは本当に人が少ないんですね。そこの通りでファッションショーをやりたいと言ったら、警察がまず反対して結局できなかったんですね。本当におもしろい活用はいくらでもできるんですけど、いろいろな許可がなかなか制限されてできないというのがあって。

たった 1 日のイベントですらできない状態で、本当にこれから、地方にはたくさんアーケードがありますから、商店街というか、考えていかなければいけないと思います。

都市といっても東京だけじゃなくて、地方都市もたくさん考えていかなければいけないと思いますけど、ぜひ、そのお考えも聞きたいなと思います。

【講演者】 そうですね。アーケードの話はさっき前橋の例で少しご紹介しましたが、一過性になってはだめだということで、地元の前橋芸術週間という NPO があるんですが、

そこが継続的にずっと活動していきまして、結局市が協力するかたちで、あるスペースを本格的にアートの場所に使って何かやろうということが決まったようです。やっぱりだれかが始めなければいけないということじゃないかと思います。

ただ中心市街地に残されたアーケード街をどう再生するかというのは、これは本当に頭の痛い問題で、さっきご紹介した前橋の例も、その後どうなっているかというのはまったくわかりません。でも、だれかがやらなければいけないということと、さっきの催しも結局、「よそから来た者がやっている」ということで、地元の人にとってはそういうふうに見えていると思います。でも、その中で「あっ、こんなことをやっているんだ」ということで、感激することもあるのですね。そうすると、住んでいる人たちの気持ちがまず前向きになっていくということが何よりも重要です。それは越後妻有のお話にもありましたが、そういうところから始めていかないと、すぐに経済的な論理とか、人が来ないと商売が成り立たないとか、それがベースのところとしてあると思いますけど、自分の町に誇りを持つ、この町で頑張っていこうという気持ちを取り戻していくというのが、おそらく一番重要だと思います。

今日いろいろご紹介したクリエイティブシティの海外の例も、目に見える結果はともかく、何が一番大きいかというと、産業という自分たちの町が栄えていた要素が衰退してしまって、存在価値そのものがなくなってしまったところで、その要素が再生されていくプロセスにアートがかかわっていくということがすごく重要だと思うんです。それがいろいろな場面で、いろいろなかたちでできるんじゃないかなという気がしています。

そのときに、だれか中心になって引っ張る人が必要じゃないかというのがお話だったと思います。地域に入って、話し合いをされる方は、なかなか日本にはまだいないかもしれません。でも、先ほど来何度も紹介しているアート NPO の方々は、NPO といってもいろいろな種類があるので、全部そうだとは言えませんが、とりわけ中間支援型の NPO と呼ばれている人たちは、自分たちが芸術活動をやることが目的ではないんですね。

芸術そのものを振興するというだけでなく、芸術を振興することによって社会を変えようという、日本の社会を変えるのはアートしかないという、非常に強い確信を持った人たちです。ですから彼らがそういうかたちで町に入っていって、何にもへこたれずに、とにかくやっていくんだということの積み重ねが、私は一つの光明になっているかなという気がしています。

【委員】 私は今日の二人のお話で共通するのは、やはり都市と、新潟の里山等に人を呼

ぶという、外から交流させるというか、移動させるというか、そういったことで共通項があると思うんです。昔は移動させるということに対して、いままではビジネスで移動したり、帰省したり、法事で動いたりという必然を充足させるために、国の交通網が必然に向けて素晴らしい蓄積をしてきたと思います。

でも今日のお話を聞くと、文化を培うこれからの国土交通行政という今回のタイトルに鑑みると、必然の国土交通と文化やアートが生み出してくれる、そこに行くことの偶然性という、偶然を生み出す文化とかアートの意味合いみたいなものが、これからの国土交通行政に何かリンクする部分があるなというのを感じました。

それで質問として私は、たぶんその文脈でいくと、文化、アートで偶然を生み出したいから道をこうつくりたいということと、いままでの必然ということの文脈で、こういうふうにつくるほうが効率的なんだというところの争い、せめぎ合いで、先ほどの悩み、なかなか苦労しているという、「道一つ」という話につながると思うんですけど、いかがでしょうか。

【講演者】 きちんとお話するとすれば、国交省さんとかがいろいろ頑張って、たとえばまちづくりに文化というかたちでかかわってくださるのはありがたいと思うけれども、でもはっきり言って、それは本当にありがたいんだけど、僕はなくてもいいと思っているんですね。

文化というのはやっぱり基本的には、本当にだめな時代とか、だめな国の中でできてくるもので、たとえばイギリス病のときのイギリスがビートルズとか劇を生んできているみたいなどころがあるわけでしょう。

いまここで出てきているナントの話とか、工場とか、もう本当にどうしようもなくなってみんな出てきたものであって、それはおそらくいろいろな地域で、本当にだめだと思ったら、最後に出てくる話のものだと僕は思っています。

現実的に、前例がないとか、そういったいろいろなことの話で、公園一つ何かやろうとしたって何もできないということばかりですね。政策じゃ、なかなかうまく行かないと思っています。

【座長】 ご紹介いただいた、文化をきっかけにした町の再生ですね。確かに当事者の芸術家の方のインスピレーションということはもちろん欠かせないんだけど、周辺を整えるということは、行政や市民の存在が非常に大きな役割を果たしているということはあるんじゃないですか。

【講演者】　そうです。まちづくりとかに文化、アートがかかわっている例はいっぱいあるんです。本当に現実的には、何も対応してくれていないわけですよ、いろいろなところが。そういうことが、現場ではとにかく、何も対応されていない。

【座長】　対応というのは行政当局が。

【講演者】　まったく対応できない。もちろん、いい例外はいっぱいあるんですよ。でも基本的には、いまいろいろなところで公共事業的にものにかかわるところでは、ほとんどいろいろなことは何もできないですね。

【座長】　おっしゃるとおり、いろいろバリアがある、ハードルが高いと。だからこそ、今後そういうことをなくすための努力は、公的な立場で支援してもよろしいんじゃないでしょうか。

【講演者】　やっていただいたほうがいいんだけど、ただね、現実から言えばものすごい先の遠い話だし、実際にいろいろ動いていることに関しては、対応できないと思うんですね、僕は。

だって、これは 20 年間、ファーレ立川でもやっとやりましたけど、機能のアート化。これは 1994 年ですが、これは国交省もおもしろいかいろいろ言ってくれていながら、結局現実的には、いまいろいろな場面で、ファーレ立川ぐらいのことをやるのもまだ厄介なのがほとんどの現場ですよ。

【国土交通省】　二十数年前は、たとえば環境ということについても、それほど理解が得られている状況ではなかったんですが、それがいま環境については認知されてきて、河川や道路を整備するときに緑化をするということや、プロムナードをつくるということについて、かなり普通になってきました。

すぐには行かないかもしれませんが、行政の末端まで意識改革が進み、そういうことに予算を使うことに合意が得られてくれば、かなり現実が変わってくると思います。そういうことを考えて、こういうフォーラムをさせていただいているということなので、ぜひあきらめないで行政の取り組みにもご協力下さい。

質問は二つありまして、一つは学生やアーティストや地元の方たちを結びつける、組織化をするということをどういうふうにやられてきたのかと。

もう一つは、まちづくり交付金などで、ソフトの部分でも NPO などを支援できるような仕組みとしてはある中で、NPO の支援のしどころが一番適切なのはどのようなところかについてご意見をいただければと思います。

【講演者】 芸術や文化というのは、効率性では測れない価値があるところ自体が本当の存在価値ではないかと。国土交通行政にかかわるいろいろな分野の方々は、最初の基準が違うんだと思うんですね。

道路をつくったり、橋をつくったり、港湾管理をしたりというのは、まず安全でなければいけないとか、規則がなければいけないという、そこからスタートしていますけど、アートはまったく逆で、既存の価値を打ち壊していくというところから始まりますから、そこにどれだけ歩み寄れるかということが僕はポイントじゃないかと思います。

芸術のほうを軸足にしてものを見ていくということが非常に重要ではないかなと思います。

アート NPO にどういう支援をしたらいいかというと、一言で言えば、彼らを信頼して任せるとのことだと思います。もちろん安全とか、そういうことが脅かされてはだめだと思いますが、そんなことができるのかという途方もないアイデアにもまず耳を傾けて、それを信頼して、必要な資金も提供していくということが最も重要ではないかなと私は思います。

【講演者】 先ほどの質問でもありますが、あらゆることを若い人たちが表でやるというやり方をしないとものが動かないだろうと思って、2000 年の冬から若い人たちが現場に入り出して動いていった。それをとにかくやるしかないと思います。

とにかく非常に趣味的だし、生理的だし、個人的なことですから、なかなかオーソライズされにくいのが、こういった動きだと思うんですね。これがオーソライズされて一般化された瞬間に、デザインであり、土木であり、計画になってしまう。そうすると、これは全然違う話になるんですね。

【座長】 いえ、今日は大変貴重なご意見でした。

【講演者】 国交省さんでせつかくこういう検討を始められたのであれば、私がぜひお願いしたいのは、国交省さんの職員の方に、とにかく見に行ってほしいですね。

そしてアートの力というものをまずご自身で納得されないと、制度を動かそうとか何とかという話ではない、自分の中のモチベーションとして出てこない、やっぱりこういう話は動かないんじゃないかという気がすごくします。

【委員】 僕はアートじゃないですけども、やっぱり 20 年ぐらい地方都市に行って、まちづくりをやっているんです。つくづく思うのは二重の壁があります。一つはよそ者だという話です。

もう一つは、県の人にしても、市町村の人にしても、本当に動かないですね。考えてみれば 60 年も、市町村は県の言うとおりに、県は国の言うとおりにやってきて、自分で考えてこなかったというのが一つですね。あと、もう一つ大きいのは、面倒くさいことはやりたくないんです。要するに新しいことをやろうとすると、パワーが要るし手間ひまもかかる。やってもあんまり評価されないんですよ。

つまり役所というのは、減点はされるけど、いいことをやったらプラスに評価するというシステムがないわけで、良心にとか、その人の性格に期待することがあって、なかなか一般化しないわけですよ。

だからそのへんを、組織には期待しないとは言いつつ、そこを変えないといけないので、そこを何とか考えてほしいと思います。

一番簡単なのは、国交省ベースの話でいくと、2 年交代で人事をやっているんだけど、それをやめて少なくとも 5 年交替にするわけです。地域の人と親しくなって、信頼関係ができて、少し動き始めたら、もう変わってしまうという現状を改める必要があります。

最後に一つだけ聞きたいんですけど、いろいろなことをやっておられて、それはそれで元気が出て、ハッピーな時間ができて、みんなも生きがいが出ていいと思うんですが、やっぱりある意味では将来にストックで残っていかないと、何かそれが終わったら終わりという感じになっちゃいますよね。そのへんのところで、何か工夫されていることはありますか。

【講演者】 たとえば今度の土日にバスツアーがあって、これは結構恒常的にやり始めている。本当に知らない人が 30 人ぐらい申し込んできているんですね、1 泊 2 日で。それで結構そういうことをしている。それから空き家プロジェクトについては何十人かの方がオーナーになって、ときどき行ったりしている。そういうことを含めたいろいろなことはやっているんですね。

作品のうち例えば、実際にレストランとして使っていくとか、地域的なベースアップは相当できているし、ポジティブな面はいっぱいあるんです。いま篠原先生が言われたことに乗って言うと、政策だからしょうがないけれども、いくつかのところに突っ込んで、「本当にやった」という例を出してもらいたいですね。

いろいろな行政だって、本当に地方自治体は厳しいですね、人的素材でも。そういう中で、頑張って、成功例をいくつかつくってもらったほうが、おそらくいろいろなところに希望を与えるだろうと思っています。

【委員】 まちづくりでもアートでもいいんですけど、事後評価をちゃんとやって、地域が本当にどのくらい良くなったかというのを、コストの話じゃなくて、やってほしいんですね。それで、そういうところには重点的に支援をするというシステムを、ぜひとも考えてもらいたいんですよ。

つまり事業をやる前のアセスメントみたいなものはやるんだけど、事業をやった後、実際にどのくらい地域が元気になったかとか、満足している人が増えたかとか、そういう評価というのは本当にやっていないですよ。いままでは、お金をつけて事業をやったら、その後のレビューはあまりしないというのかな。そこがやっぱり欠点じゃないかと思います。

【国土交通省】 地域の方というのは確かによその方が入ってくることを非常に警戒するし、自分たちが大事にしてきたものをいじられることにすごく抵抗があって、そのために大変なご苦労をされたと思うんです。その後をどうやって引き継いでいくか、何か次を考えた方法論を、どうお考えでしょうか。少し先の話ですけれども。

【講演者】 まず、うちのスタッフが 10 人を超えて、もう現地に住んでいます。産直とか、オーナー制度とか一種の里山協働機構的なものを地元の人たちと組んでいますが、そういう共同機構的なものができにくく、相当厳しいですね。

観光の前に、人が住んでいるところの道路はとにかく使えるようにしてほしいと思っているんですね。やっぱり道っていうのは人があって集落があるからつくっているのに、それが効率が悪いからといって手を入れなかったり、あるいは除雪ができないということが、まず間違っているんですよ。

そういうところからやらないと、そのうえでのいろいろなことが観光になるのであって、観光は一般的にはうれしいけれども、これでやっている限りはやっぱり効率の世界に入ります。

僕らも一生懸命観光だと言って、短期的にもそこそこ成功しないと地元で総すかんを食いますから、いろいろやっていますけれども、非常にデリケートなところではありますね。

【座長】 それでは今日の会議を終了したいと思います。皆様、熱心なご討論をどうもありがとうございました。